505
18

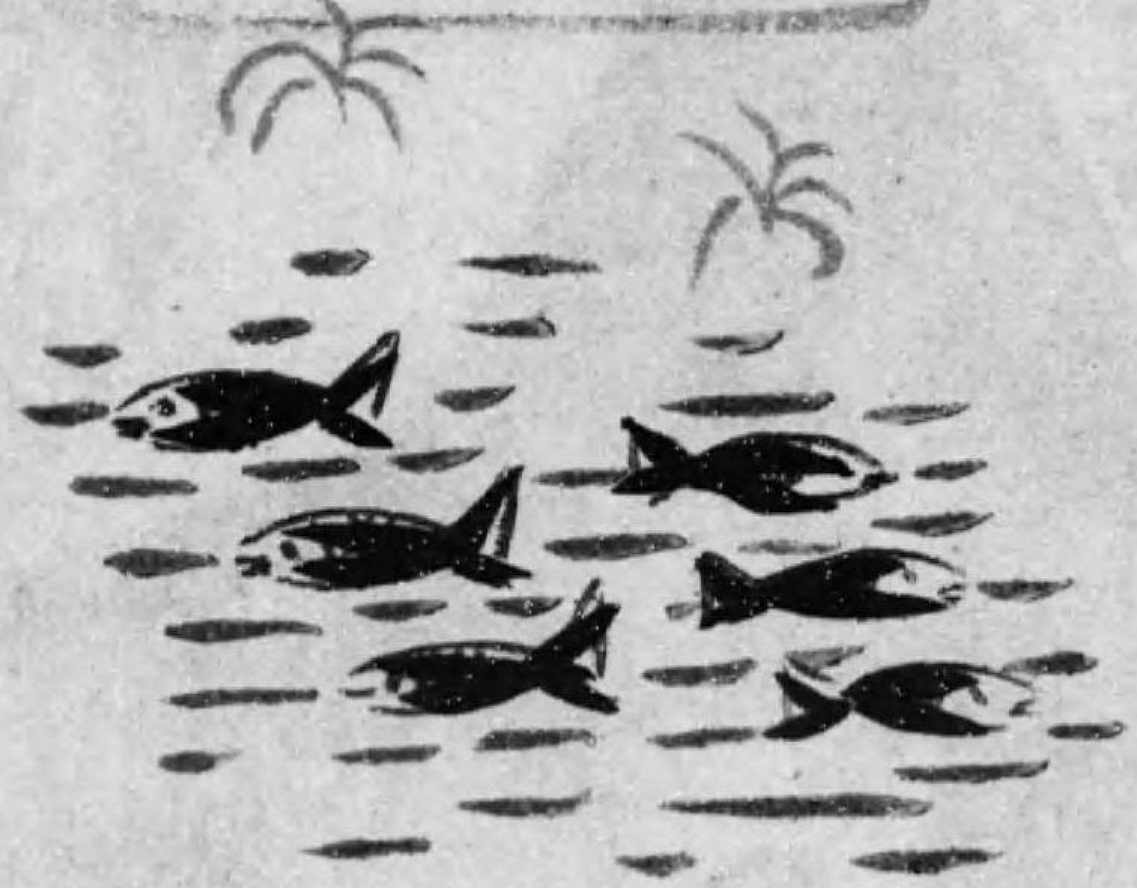
始

505-18

祭の笛

童謡集

白秋童謡第五集



[illegible]装幀

アルス刊

大正
11. 7 4
内交

はしがき

夏の祭のじせつになりました。わたしたちの子供のころにはあの祭の笛ぐらゐなつかしいものはありませんでした。あの笛や、それから鉦や太皷のお囃子や、風船玉や、五色の獨樂や、薄荷糖のにほひや、今思ひ出しても樂しいものでした、祭は。

夏の祭は紅い金魚の尾鰭のやうに華やかで、また青い乾草のやうに日向くさい、何かしら胸さはぎのするもの

です。その遠くで晝の花火があがるのです、黄色い煙の花火が。

夕方になると田舍では田圃の水にかへろが啼いて、螢がほうほうと、堆肥のかげから飛んで出ます。すずしい白の蓮も、唐黍畑の向うからいいかをりを濕らして來ます。町の方でも大きな桃色のお月さまの下でわつしよい〳〵とやつてゐます。それが、この小田原のやうな海のそばになると、そのお囃子の間々に、ゆつたりとした浪の音や、さびしい川瀨のひびきやらがきこえて、きいてゐると、何だかかう迷子にでもなりさうな、どこまでもどこまでも岬から岬へ歩いて行つて了ひたいやうな心もちになつて來ます。

わたしはいま、わたしの木兎の家の赤い屋根の屋根裏から、さうした月夜のお囃子をきいてゐますのです、祭のお囃子を。

祭は子供のお夢を育てます。子供のいのちをいちばん美くしくいきいきと湧き立たせるのは祭です、そして豐かな想像を。

あの笛の前の晩の胸さはぎや、濟んだあとのさびしささうしたじせつの移りかはりも子供がいちばん深く感じ

ます。

あの笛のやうに皆さんをほんたうにひきつけるものがお謠です。吹いて見ましよう、わたしはあの祭の笛を。わたしは皆さんとおなじ子供にならなければ、そのお笛は吹けません。

それだから、わたしは昔の子供だつたときのことを思ひ出して吹きます。

それから、むろん、今は大人になつて了つたけれど、わたしのやうな大人の心とあなた方子供たちの心と、どこかでおんなじに觸り合ふ素直な、いつまでたつても

變らぬいい笛の音もあります。

それから、木や草の葉つぱや、目に見えぬほどの小さなお星さまのまたたきや、馬追蟲や、そして、赤いお胸の駒鳥や、さうしたものが皆さんにお話しかけるいろいろなお謠も、私は代つて吹いてあげたいと思ひます。さういふ空や山や野つ原や、遠い海のささやきは、それこそおとなしい心になつて、ほんたうに赤ん坊のままの心できいてゐないときこえてまゐりません。さうしてそのままにそれをお笛に吹かねばなりません。

それにほんたうに、耳や、眼や、お鼻や、お口や、そ

れから肌や指で觸つて見なければ、てんたう蟲の翅音も、合歡の花の色も乳豆のにほひも、ねこやなぎのぼや／＼もほんたうにはわかりません、さうしてみんなが持つてるわたしたちと同じやうないのちの息づかひも、智慧の心もわかりません。ねんねのお夢にしたところで、やつぱり何か一度は見たりきいたり觸つたりしたものから生れて來ます。

だから、あなた方も、丁度あの蝸牛のお角のやうに、何にでもひとつひとつ觸つて、それからそれからと色々な美くしいお夢の中には入つてゆかねばなりません。ほんたうのものはみんな綺麗です。そして、みんないいお夢を持つてゐます。

あの祭の覗きめがねや、酸漿や、風船玉に、皆さんがいつでも飛びついてゆくやうに、いつでもあのはりつめた氣もちで、空や、海や、動物、植物、それから石や金や、さうした何にでも飛びついて、ほんたうに見るといふ事が何よりたいせつです。花でも蟲でもみんないい智慧を持つてゐます。智慧のお祭と云つていいくらゐに。で、わたしはあなた方をさうしたほんたうのいい自然の祭に呼びよせるためにも笛を吹きます。

ここに芥子のたねが一粒あるとします。あなた方はその芥子つぶを掌の上にのせて、じつと眼をつぶつて、この芥子のたねが、どうなるかどう生ひたつてゆくかを考へて御覧なさい。あの紅い綺麗な花が咲くまでのことを思つて見ても、ほんとに樂しいものです。それとおなじやうに、あなた方の心の上にも、いろ〳〵の花の芽が育つてゆきます。さうして一日一日に、まだあなた方の考へも及ばないやうないろ〳〵な明日のお夢が少しづつ近寄つてまゐります。何か待たれるいい事が、きつとあなた方を、あの祭の前の晩のやうにうれしくて〳〵眠らせ

ないでせう。さうしたあなた方の心の芽を育ててあげるためにも、私は笛を吹いて、あなた方といつしよに、さういふいい仕合を待つてゐてあげます。

この「祭の笛」といふ本の中から、さうした私の笛の音をよくききわけて下さい。

それから、この中にはふた通りの笛の音があります。ひとつはあなた方のお夢をもつと深くもつと美しくしたいためのもの、もひとつはあなた方の智慧をもつとこまかくもつと輝やかすためのもの、このふたつのわたしの笛の音が、ほんたうにあなた方の心のやしなひになる事

ができれば、わたしはこの上の喜びはありません。今夜もいいお月夜です。屋根裏から下へおりると庭は海の底のやうに薄青く、それに露がいつぱいにちらちらしてゐます。前には紫の花あやめが眞盛りです。まだ祭の笛が鳴つてゐます。

大正十一年五月、祭の晩

小田原木兎の家にて

白秋

しるす

祭の笛

祭の笛が鳴りまする。
今年も豌豆もぎりましよ。
祭の笛が鳴るころは
螢もつけます、赤の襟。

祭の笛を吹く方は
お里のかはいい御宮さま。

祭の笛にさそはれて、
蛙も啼きます、田の水に。

祭の笛よ、なぜ遠い。
晝間の花火は寂しかろ。

祭の笛にねんねして、
三日月さアまも丘の上。

祭の笛が鳴る夜さは
芝居の灯もあちこちに

祭の笛をきいてれば
迷子になるよな、うれしよな。

祭の笛にねかされて
ねむれば魔法の夢ばかり。

祭の笛を吹く方は
いつでも小さな御宮さま。

祭の笛目次

祭の笛序詩

第一部

ねんねのうた

ねんねのお國……三

ねんねんねんねん唄……六

こぬか雨……九
お晝寢……一二
げんげ草……一四
浪の音……一七
南の風の……一九
ねんねの騎兵……二一
夢買ひ……二三
搖籠のうた……二五
ねんねこ唄……二八

田舍のうた

朝……三三
こんこん小山の……三四
涼風、小風……三六
五月の聲……三九
田舍……四三
跳ね橋……四八
水はぢき……五〇
虹と仔馬……五三

燕の歌……五四
乳いろ水いろ桃いろ……五七
南の風……五九
午後一時……六三
日雀と椿……六四
草もみぢ……六七
春……六九

知られない、なにか待たれるもののうた

蝶々の旅……七三
月夜のお囃子……七七
鶏頭……八〇
影ぼうし……八三
七つ坊主……八五
吹雪の晩……八八
りんりん林檎の……九〇
お掌の林檎……九三
青い月夜……九六
昨夜のお客さま……九八

弟の誕生……一〇一
カステラ……一〇五
足音……一〇九
お母さん佛さま……一一四

寒いお山のうた

雀のお宿……一一九
ちよんちよん雀……一二一
ふくら雀……一二三
雀の親子……一二五

矮鶏……一二八
この山……一三〇
ひとりぼつち……一三一
椋鳥……一三三
こがらし……一三四
ぼつつり子猿……一三六

さびしい人たちのうた

閻魔の癇癪……一四一
良寛さま……一四三

鷄爺さん……一五〇
雉子射ち爺さん……一五四
山の小父さん……一五六
先生……一五七
落穂ひろひ……一六一
馬どろばう……一六四
かぐや姫……一六五
紅燈……一六七
ほうほうほうほろりこ……一六九

鷺と鶴と蝸牛のうた

鷺と鶴……一七五
角無し……一七七
蝸牛のお藏……一七八
空威張……一七九
つむじまがり……一八〇
修繕屋……一八一

第二部

學問のうた

言葉……一八五
五十音……一九〇
歌へよ子供……一九四
おうた……一九八
數學……二〇二
魔法つかひ……二〇四

阿蘭陀船……二〇九

空のうた

雲の歌……二一七
星の歌……二二二
月暈日暈……二二七
太陽系あそび……二三〇
日光……二三五
夕凪朝凪……二三七
月夜の虹……二三八

海邊の虹……二四二
陽炎……二四五

花や鳥や獸のうた

お月見……二四九
羽音……二五二
お花の家庭……二五九
小鳥の歌ひ手……二六五
卵……二六九

挿繪目次

北原白秋氏
表紙
外裝
扉（第一部）
扉（第二部）
前川千帆氏

14

りんりん林檎の（三色版）
五十音（三色版）
星の歌（三色版）

1

帝國圖書館藏

ねんねのうた

ねんねのお國

ねんねのお唄はいいお唄、
ねんねのお唄を聴いてれば、
桃いろお月さまかすみます、
ねんねのお國へまゐります。

ねんねのお國は花祭、
夢から夢へとにほひます、
小鳥も鳴きます、歌ひます、
お囃子なんどもきこえます。

ねんねの祭へゆく人は、
ちらちら、丘からつづきます、
小さなお馬に花の山車、
鵞鳥のお舟も通ります。

ねんねの祭で見る人は、
何だかうれしい人ばかり、
いつだか、何處でか、どうしてか、
何だか見たよな人ばかり。

ねんねのお母さまいいお方、
いつでもかはいとお抱きなる、
お手々を曳かれて、祭見て、
はぐれて泣いてりや目がさめた。

ねんねん唄

月夜の屋根の窓硝子、
寝てゐりや、さみしい、なつかしい。
月の光がは入ります。

月の光を見てゐれば、
なアぜか夜聲が聽かれます。
なアぜか涙がながれます。

聽けばこの世か、前の世か、
いイつかゐたよな、聞いたよな、
あれ、あれ、あの唄、ねんねね唄。

ねんねのお母さま何處へ往た。
いイつか見たよな、泣いたよな、
お家の裏の青葡萄。

月の光を見てゐれば

なアぜか夜聲がきかれます。
なアぜか涙がながれます。

こぬか雨

こんこん小雨の
ねこやなぎ、
こぬかの小雨がかかります。
こんこん小雨の
こぬか雨、
こんこんこまかにおしめりか。

こんこん小雨の
ねこやなぎ、
ねんねの寝た間におしめりか。
こんこん小雨の
こぬか雨、
明日は菫も咲いてましよ。

こんこん小雨の
ねこやなぎ、
ねんねもすやすややすみます。

寝てるまん雨の
どしや降りだ！
裏の菫[illegible]つきの
[illegible]おっこうた！

お晝寝

日向の秣に晝寝すりや。
祭の囃子がきこえます。
鉦や、太鼓や、馬の鈴、
風船玉もピイと鳴る。

覗きからくり、薄荷糖、
花火もぽん／＼あがります。
日向の秣がなつかしい、
晝寝りや祭の夢ばかり。

おふみの すいえもはすれてる」。

げんげ草

ねんねのお里のげんげ草、
ぼちぼち、仔牛も遊んでる。
牧場の牧場のげんげ草、
誰だか遠くで呼んでる。

ねんねのお里はよい田舍、
ねんねのお汽車で下りたなら、
道はひとすぢ、田圃道、
藁屋に緋桃も咲いてます。

ねんねのお守はゐやせぬか、
ちよろ〳〵小川もながれてる、
いつだか見たよな橋もある、
小藪のかげには閻魔堂。

ねんねのお里で泣かされて、
お背戸に出て見たげんげ草、
あのあの紅いげんげ草、
誰だか遠くで呼んでゐる。

ポサーやおあとよんでいるう——

浪の音

お山で戀しい浪の音、
寢てゐりや、遠くで浪の音。
ゆつたり、ゆつたり、ゆつたりこ。

いつだか、月夜のお祭に
はぐれてひイとりあるいてた。

いつだか、蒸汽でついたよな、
何處かの港の紅林檎。

ねんねよ、ねんねと、寝かされた
あれ、あのお里の浪の音。

何だかうれしい浪の音。
いまでもねんねの浪の音。
ゆつたり、ゆつたり、ゆつたりこ。

南の風の

南の風の吹くころは、
朱欒の花がにほひます。
朱欒の花の咲く夜さは、
空には白い天の川。

三つ星、四つ星、七つ星、
數へてゐたれば、つひ、眠むて。
つひつひ、とろりとねんねした。
そのまま朝までねんねした。

南の風の吹くころは、
朱欒の花がにほひます。

ねんねの騎兵

わたしのかはいい龍騎兵
唐黍畑に晝寢して
お馬に、かぽ〳〵、逃げられた。
お馬は木の馬、青の馬、
野を越え、山越え、森越えて、
湖水のふちまで來て見れば、

野鴨があちこち、雁一羽、
月夜は凍るし、宿は無し、
露西亜の獵師にすくはれて、
はるばる戻ればまだお晝、
唐黍畑のそよ風に、
涙もほろほろ、龍騎兵、
すやすや眠ながら泣いてゐた。

夢買ひ

ねんねん寢山の栗鼠の子は、
啼き啼き、お里へ夢買ひに、
夢買ひに。

とんとと叩けど、よう起きず、
月夜は寢ねした影ばかり、
影ばかり。

葡萄の夜露を浴びましよか、
廐の盥に宿借ろか、
宿借ろか。

粉場のお臼へこけ落ちて、
お山は雪だと夢に見た、
夢に見た。

搖籠のうた

搖籠のうたを、
カナリヤが歌ふよ。
ねんねこ、ねんねこ、
ねんねこ、よ。

搖籠のうへに、
枇杷の實が搖れる、よ。
　ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこ、よ。

搖籠のつなを、
木ねずみが搖する、よ。
　ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこよ、

搖籠のゆめに、
黄色い月がかかる、よ。
　ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこ、よ。

寝ぼけておつこちたよーうー

ねんねこ唄

ねんねや、ねんねや、おねんねや、
坊やのお父さん馬買ひに、
馬は何馬、うさぎ馬、
幌かけぐるまもほしいなら、
明朝曳かしてしんぜましよ。

ねんねや、ねんねや、おねんねや、
坊やのお母さん鳩呼びに、
鳩は何鳩、かはら鳩、
雀のたまごもほしいなら、
明朝さがしてしんぜましよ。
ねんねや、ねんねや、おねんねや、
ねんねや、ねんねや、おねんねや。

坊やの父さん何買ひに
油買ひ坂で つんのめって死ー

田舍のうた

朝

蝸牛角振れ、
野茨が小風に搖れ出した。
雀もちゆんちゆく鳴いてゐる。
お乳しぼりも起きて來た。
牡牛も青草食べ出した。

こんこん小山の

こんこん小山のお月さま、
ついたち二日はまだ小さい。
仔馬の耳より
まだ小さい。

こんこん仔馬も馬柵の中、
一飛び、二飛び、まだ小さい。
となりの兎より
まだ小さい。

こんこん小藪の青葡萄、
一つぶ、二つぶ、まだ小さい。
仔馬の眼々より
まだ小さい。

上

涼風、小風

涼風、小風、
小雨の小藪、
ちらちらあかれ、
葉洩れ陽透くに。

野葡萄の蔓に
駒鳥啼いて、
みどりや、瑠璃や、
鈴生る、玉が。

駒鳥、小鳥、
揺れ揺れ、枝を、
いえ、いえ、まだよ、
露が巣にかかる。

この巣の中に、
卵が五つ、
卵が五つ、
今朝生んたばかり。

五月の聲

五月の野原で聽いてると、
いろんな小聲がして來ます。
「もうぢき夏だ、涼しいな。」
そオれは柳の旅燕。

「あら、あら、郭公が啼いてるわ。」
わすれな草です、空色の。

「眩しい、眩しい、光つてる。」
龍膽の芽は出たばかり。

「彼方行つて、彼方行つて、露がちる。」
葉洩れ陽ちらつく巣の中よ。

「あれあれ、卵がかへります。」

枝から駒鳥のぞいてる。

「螢の嬰兒さん、もうお起き。」
「てんたう蟲の祭です。」

「そんなら、ヴアヰオリンを彈きましよか。」
「かまきりなんぞに用は無い。」

「わたしも白粉つけましよよ。」
蝶々は生れてまだ輕るい。

「さあさあ、一緒にをどりましよ。」
玉蟲小母さん、お洒落さん。
小川も跳ね跳ね流れます。
「五月だ、五月だ、涼しいな。」

田舍

お窓の硝子を開けとけば
いろんな羽蟲が飛んで來る。
田舍は涼しい涼しいな。

ぶんぶん黄蜂はまだ小さい、
それでも薄紅ランドセル。
田舍は涼しい涼しいな。

蝶々は雪のように舞うて來る、
お翅を立て立て、また留る。
　田舎は涼しい涼しいな。

開いて留るは焦茶の蛾
肥つちよで、焦茶の八字眉。
　田舎は涼しい涼しいな。

ネクタイピンの玉、てんと蟲、

つまめば割れます、翅が出る。
　田舎は涼しい涼しいな。

素木の卓子、竹の椅子、
まゐまゐつぶろも薄みどり、
　田舎は涼しい涼しいな。

小矮鷄のお客さん、こつこつこ、
土間には鉋屑、濡れキヤベツ。
　田舎は涼しい涼しいな。

お乳のしぼりたて飲んでれば、
蜜柑の花だかにほひます。
　田舎は涼しい涼しいな。
窓から見てると、郵便屋
兩手をふりふり、「今日は。」
　田舎は涼しい涼しいな。
遠くに牧場のお月さま、

ぽつぽつ寝てゐる斑牛。
　田舎は涼しい涼しいな。
小山があちこち、黍畑、
近くに赤屋根、ながれ雲。
　田舎は涼しい涼しいな。
天氣だ、天氣だ、青空だ、
町ではお午の鐘が鳴る。
　田舎は涼しい涼しいな。

十 跳ね橋

跳ね橋の向ふに、
黄色い月があアがつた、
川土手を行かうよ。

跳ね橋があがれば、
帆を巻き、帆を巻き、ぎィいちこ、
帆柱がとほるよ。

跳ね橋がおりれば、
乾草車か、かァらころ、
白い馬がつづくよ。

跳ね橋のしもには、
灯が水に、ちィらちら、
ハアモニカを吹かうよ。

水はぢき

水はぢき、水はぢき、
ひとりひとりはぢこ。

親指、王樣。
小指は女王。
中指、將軍。

人さし指が巡査で。
藥指は醫者。
　これでも暑いなら、
アイスクリームを召しあがれ。

虹と仔馬

濡れろ、濡れろ、仔馬、
虹の輪の下を、
連れ連れ駈けれ。

跳ねろ、跳ねろ、仔馬、
川瀬の石を、
飛び飛び越えて。

踊れ、踊れ、仔馬、
虹の輪の中で、
雲雀が、雲雀が啼いてるぞ。

燕の歌

燕の雛が一羽よ、
楊の枝にとオまつた。
搖れる、搖れる、搖れる、よ。
啼いてる、啼いてる、啼いてる、よ。

燕の連れが三四羽よ、
また來て、ついつい、とオまつた。
搖れる、搖れる、搖れる、よ。
夕燒、夕燒、夕燒、よ。

燕の頰つぺた赤いよ、
楊は水の輪畫きたてた。
搖れる、搖れる、搖れる、よ。
濡れる、濡れる、濡れる、よ。

燕の迷子があちこちよ、
まだまだとまれず翔けつた。
搖れる、搖れる、搖れる、よ。
月が出た、月が出た、月が出た、よ。

乳いろ水いろ桃いろ

乳いろお月さま、夜明けごろ、
羊のお小舍へ、みな行こよ、
お乳をわけましよ、貰ひましよ。
仔馬もぴよん〳〵跳ねて來な。

水いろお月さま、お午過ぎ、
粉場のうしろで、かくれんぼ、

お粉にもぐりましよ、まみれましよ。
鼠もちよろ〳〵顔出した。

桃いろお月さま宵のうち、
乾草小舎まで、みなおいで、
ハモニカ吹きましよ、歌ひましよ。
蝶々もすや〳〵おやすみな。

南の風は

南の風は
そよそよ風よ、
紅い帆を一つ
海からほんのり連れて來た。
牧場の牝山羊らがそれ見て、　子産むだ。

西吹く風は
暴風雨のしらせ、
夜明の空に
虹の輪ぽつかり吹き立てた。
潮に乗つた鰤の群が、それ見て、沈んだ。

北吹く風は
大寒小寒、
白い鷹を一羽
ひようと山から吹きおろす。

ばら〳〵、寒雀が、それ見て、縮んだ。

東の風は
ややまだ寒い。
風車一つ、
粉場のお屋根に繕つた。
乳屋の妹つ子が、それ見て嫁入つた。

午後一時

圓い空青いね。
向うに牧場、
ピカピカ棕梠の木一本ね、
斑らの豆牛ぼつつりね、
彼方向いてぼつつりね、

いつまで寢てゐる、ぼつつりね、
誰か行つて搖り起せ、
ちよいと、此方向かせ、
ひら〳〵蝶々行つて來い、
小さう小さう遠くなれ。
おや、おや、誰だか、豆人形
紅いハンケチ振り出した。
ところでお屋根の大時計、
ちいん。——もうもう、おおい、おおい。

日雀と椿

椿に日雀が飛んで來た。
あれ、あれ、空見て啼いてゐる。
椿の花は皆紅い、
重なり重なり咲いてゐる。

日雀の頭は動いてる。
啼く時、啼く時、動いてる。
椿の花も搖れ出した。
花から花へと搖れ出した。
花から花へと搖れ出せば、
どの葉もどの葉も搖れ出した。

枝から枝へと飛び飛びに、
日雀は啼き啼き遊んでる。
日雀はどんなにうれしかろ、
椿もどんなにうれしかろ。

草もみぢ

淡紅いろ、紅いろ、鶸茶いろ、
かはいいもみぢは草もみぢ。
すべりこしましよか、つみましよか、
日向の草土手、草もみぢ。

松蟲草やら、われもかう、
龍膽も咲いてて、草もみち。
のぞけば碧い實、瑠璃の玉、
小さな眼々して、草もみち。
お人形ねかそか、あづけよか、
かはいいかはいい草もみち。

春

高い山ひとつ
まだ雪ばかり、
中の山五つ
赤い野火はしる。
低い低い端山
もう花盛りよ。
ぴいひよろろ、〱、
鳶啼いて廻れ。

知らない、なにか
待たれるもののうた

蝶々の旅

湖ははるばる、
空遠し。
浪はさざなみ、
日和浪。
南の風に、
おくられて。

黄や、紫や、
白の蝶。
何處へゆくのぞ、
數知れず。
すれすれわァたる
今日の凪。

晝は事なく
わたれども。
とォまるもの無き
浪つづき。
凪はひととき
目路の果。
夕立雲も

湧くものを。
どうせは、神鳴り、
いなびかり。
早よ早よ、わァたれ、
夜は凄い。
蝶々、蝶々、
旅の蝶。

月夜のお囃子

夜宮の灯にそそられて、
月夜の濱に出て見たが、
出て見たが。

濱は松風、浪の音、

はぐれて啼くのは磯千鳥、
磯千鳥。

笛や太鼓のお囃子は、
一岬先やら、何處ぞやら、
何處ぞやら。

戻ればうしろにすぐ近て、
たづねりや、やつぱり浪の外、
浪の外。

迷子の迷子の磯千鳥、
月夜の囃子はまだ遠い、
まだ遠い。

鷄頭

鷄頭、鷄頭、
葉鷄頭、
誰のお墓か、墓ひとつ。
鷄頭、鷄頭、

葉鷄頭、
おはぐろ蜻蛉も、飛んでゐる。
葉鷄頭、鷄頭、
いィつか來たよな、泣いたよな。
鷄頭、鷄頭、
葉鷄頭、
いつかも落ちてた栗のいが。

鶏頭、鶏頭、
葉鶏頭。
誰のお墓か、　日が這入る。

影ぼふし

ひィとりぼつちの影ぼふし、
壊れたお椅子にあちむいて。
ランプのお笠に啼く虫は、
お髭の長いきりぎりす。
カタコト鳴るのは窓硝子、
夜風が搖するか、　誰が來てか。

暗闇すかせどただ暗うて、
ちらちら、　お星のかげばかり。
ひィとりぼつちの影ぼふし、
何を爲てやら、　お待ちやら。
赤い毛絲の糸巻きが、
膝からころ〳〵落ちました。

七つ坊主

もう日が暮れる、
逢魔が時よ。
早よ早よ、　歸れ、
殘れば恐い。
一丁目の闇に、

坊主が出たぞ。
ぼっつり、坊主、
ぼっつり、一人。
二丁目の闇に
坊主が出たぞ。
ぼっつり、坊主、
ぼっつり、二人。

連れてけ、坊主、
泣く子がゐるぞ。
七つ坊主が、
ぼっつり、ぼっつり、出たぞ。

註。もと、東京の街では、日が暮れると、きまつて七つ坊主と云つて、七人連れの坊主が通つたものださうです。

吹雪の晩

吹雪の晩です、夜ふけです、
どこかで夜鴉が啼いてます、
燈もチラチラ見えてます。

私は見てます、待つてます、
何だかそはそは待たれます、
内では時計も鳴つてます。

鈴です、鳴ります、きこえます、
あれあれ、橇です、もう來ます、
いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見てます、待つてます、
何かが來るよな氣がします、
遠くで夜鴉が啼いてます。

りん〱林檎の

りん〱林檎の木の下に、
小さなお家を建てましよか、
そしたら小さな窓あけて、
窓から青空見てましよか。

りん〱林檎がなつたなら、
鶫もちらほらまゐりましよ、
丘から丘へと荷をつけて、
商人なんぞも通りましよ。

りん〱林檎に雪がふり、
一夜に眞白くつもつたら、
それこそ、かはいい煙あげて、
朝から食堂を開きましよ。

りん〳〵林檎は焼きましよか、
むかずに皿ごとあげましよか、
お客は誰やら知りやせぬが、
今にも見えそな旅のひと。

りん〳〵林檎の木の下に、
小さなお家を建てましよか、
窓から青空見てましよか、
遠くの遠くを見てましよか。

お掌の林檎

りんご、りんご、紅りんご、
林檎の小さな種子ひとつ、
お掌の畠に蒔きましよか。

りんご、りんご、紅りんご、

それそれ、日が照る、芽が萠える、
見る見る木になる、葉が繁る。

りんご、りんご、紅りんご、
いよいよ、微風、花盛り、
つやつや生ります、果が熟れる。

りんご、りんご、紅りんご、
朝からつつきに來る鳥は、
西伯利亞鶫か、黄鶲か。

りんご、りんご、紅りんご、
あれあれ、降ります大雪が、
夜晝つみます、つもります。

りんご、りんご、紅りんご、
ふと見りや、お掌に皆消えて、
やつぱり小さな種子ひとつ、

青い月夜

雪の山家の水ぐるま
いィつか廻つて、日が暮れて、
青い月夜に振る鞭は、
あァれは旅ゆく橇の人。

ちりから鳴るのは馬の鈴、
何處まで行くやら、駈けるやら。
燈火もチラチラ點き出した。
ピアノも遠くで彈いてます。
山の向うにゆく橇よ、
青い月夜はまだ寒い。

昨夜のお客さま

昨夜のお客さま誰でしよ。
夜更けて人聲してゐたが、
夙よからお寢間を覗いても、
桃色窓掛まだ暗い。

昨夜のお客さま誰でしよ。
見知らぬ子どもか、小母さまか、
それともお髭の小父さまか、
何處からおいでか、何しにか。

昨夜のお客さま誰でしよ。
お母さんに聞いたら御存じか、
お父さんはなんにも仰つしやらぬ、
ほんとに誰も來はせぬか。

昨夜のお客さま誰でしよ。
早よ早よ知りたい、逢つて見たい。
林檎畠の紅雀、
お前は誰だか知つててか。

弟の誕生

今夜のお星さん不思議です、
どうしてあんなに美くしい、
チラチラ、キラキラしてゐます。
いつもとすつかりちがひます。

私は見てます、不思議です、
恐くて、見たくて、ふるへます、
何だかひらひら飛んでます、
白い鳥です、千鳥です。

今夜は何だか不思議です、
犬だか遠くで啼いてます、
海ではエンヤラ云つてます、
なんだかしんしんしんして來ます。

まだまだ赤ちやん生れない。
お庭へ出されて、まだ待つて、
まだまだ赤ちやん生れない、
お胸がドキドキして來ます。

暗い茂みを見てゐると、
なんだか、ひいやり咲いてます、
枇杷の花です、搖れてます、
椿も青く光ります。

ほんとに今夜は不思議です、
チラチラ、ドキドキまだ爲てる、
いえいえ、だんだん恐くなる、
あ、聲がする、あ、赤ちゃんだ、　赤ちゃんだ。

カステラ

お墓の上の葉洩れ陽に、
綠の毛蟲が匍つてゐる、
さうださうだ、毛蟲に訊いてみよ、
死んだら、わたしはどうなるの。
毛蟲は默つて動いてる、
露がいつぱい毛について、

動いて、ちらちら、こぼしてる、
ほんとに毛蟲は息してる。
死んだらおまへはどうなるの、
ほんとに毛蟲よ、どうなるの、
どんなに訊いても歩いてる、
いい、いい、おまへに訊きやしない。

そんならお墓に訊いてみよ、
お墓の石には陽が照つて、

觸ると青苔濡れてゐる、
涼しい、涼しい、雨上り。

あ、あれ、栗の花が咲いてゐる。
カステラ見たいな色してる。
もひとつ、その木に訊いてみよ、
死んだらみんな何處ゆくの。

カステラ見たいな栗の花
咲いたばかりで搖れてゐる、

朝からぶんぶんにほつてる、
雫がぽたぽたこぼれてる。

いいやいいや、死んだつて、わァいわい、
もうもう誰にも訊きやしない、
なんだかうれしくなつた、飛んで駈けろ、
お八つのカステラ食べたいな。

足音

紅い蠟燭まだ點けて、
姉と弟の影ぼふし、
そのお母さまの枕もと。

「あれ、そつとして、それ、御覧、
また、お母さまお起きなる。」
二人の顔は灯に紅い。

「いえ、いえ、うしろの窓硝子、
カタ〱鳴ります、眞つ暗い。」
「あれは夜風よ、大丈夫よ。」

「でも、眞つ暗い。――呼んでゐる。」
「あれはお船よ、着いたのよ、

蒼いお月さま出るのでしよ。」

「それでも、何だか、わしや恐い、
ほれ、足音がやつて來る。」
「なんの、夜釣りに行くのでしよ。」

「いえいえ、お家へ來る音だ。
ほれほれ、だんだん近くなる。」
「お巡査さんでしよ、大丈夫よ。」

「それでも何だか、そよいでる、
あ、門の中へ入つて來た、
あ、戸を開けてる。」――「大丈夫よ。

そつとして、そつとして、ね、坊や。」
「いいえ、誰だか歩いてる。
あ、お母様の氷嚢がふるへてる。」

「あ、外から觸つてる。
鍵の孔から覗いてる。

あ、あれ、開いた。」「あ、あれ、あれ。」

寒い夜風がさアと來て、
紅い蠟燭フツと消える。
「あれ、お母様。」「お母様。」「お母様。」

お母さん佛さま

お母さん佛さま、
夕燒だ、
雀もちゆつちゆと、　飛んでゐる。
お母さん佛さま。

にぎやかだ。
何だかお祭り、　をかしいな。
明日は山から
お祖父さま、
お馬でかぼ〳〵入らつしやる。
お山のみやげに
なにもらを、
小雉子に山鳥、　しろ兎。

お母さん佛さま、
恐かない。
明朝、早よからお目覺めだ。
そしたら、お祭
見せてあぎよ、
坊やも仔馬に乘つてやろ。

寒いお山のうた

雀のお宿

雀のお宿は山蔭に、
小籔がこんもり、ほそながれ、
下手に丸木の橋ひとつ。
雀のおやどはもう寒い。
誰か來るかと出て見れど、
遠くちやちりちり渡り鳥。

雀のおやどはわびしいに、
ときたま機織る梭の音、
野山にとんから響きます。

雀のおやどに日が暮れりや、
ちらちら燈もともるけど、
夜更けは時雨の音ばかり。

ちよん〱雀

土の橋ひとつ、
水の音寒い、
ちよん〱雀、
その橋わたれ。

向うは夕陽、
こちらは氷雨、

ちよん〱雀、
その橋わたれ。
土の橋ひとつ、
まだ橋明る、
ちよん〱雀、
今のうちにわたれ。

ふくら雀

もみぢの小枝に
雀が、
ふゥくら雀が
ふくれてる。
なぜなぜ、そんなに
ふくれてる。

むしやくしやするので
ふくれてる。
なぜなぜ、そんなに
腹が立つ。
なぜだか知らない、
腹が立つ。

雀の親子

あれあれ、お背戸の楢の木に
雀が一匹留つた。
それ、留つた。
一羽の雀は親雀、
子雀來いよと啼いてゐる。
それ、啼いてゐる。

飛んで來た雀は子の雀、
あわてて枝から轉け落ちた。
それ、轉け落ちた。

上ではびつくり、親雀、
下りよとすれども木が搖れる。
それ、木が搖れる。

下でも、ばた〳〵、子の雀、
早よ早よ留まろと飛びあがる。

それ飛びあがる。

それ見て喜ぶ親雀、
擦り寄る子雀、二羽雀。
それ、二羽雀。

雀の親子がそォろつた。
それそれ、いつしよに啼き出した。
それ、啼き出した。

矮鶏

白い矮鶏かはい、番ひの矮鶏よ。
黒い矮鶏つらい、連なし矮鶏よ。

日の照る道に、山茶花の庭に、
白い矮鶏あそぶ、こここ遊ぶ。

日かげの山に、尾花の外に、
黒い矮鶏ひとり、遠く遠く求る。

夕焼小焼、とまり木に二羽よ、
枇杷の木のぼり、高く高く一羽。

北風吹くな、黒い矮鶏寒い、
明日また晴れよ、黒い矮鶏辛い。

この山

この山寒い、
もう日がかげる。
あの山溫い、
まだ日があたる。
この山退けよ、
まだ日は高い。

ひとりぼつち

山と山との
空間に
高く、ぼっつり、木がひとつ。
あれは何の木、
ただひとり、
黒く、ぼっつり、晝日中。

北風受けてか、
海見てか、
寒く、ぼっつり、日がかげる。

もうすぐ夕焼、
遠茜、
黒く、ぼっつり、木はひとつ。

椋鳥

椋鳥かはい、
椋の木に、ばァらばら。

椋鳥迅い、
遠くへ遠くへ、ちィりぢり。

椋鳥啼けよ、
霙が、霙が、寒いぞ。

こがらし

樺いろお月さん出てござる。
枯木の奥まで早や黄ろい。
こつ〳〵、啄木鳥、
もう、しまへ、
急いてもお小舎は間にあはぬ。

小さなお月さん溪の上、
藤蔓、釣橋、早や白い。
きつ〳〵、小猿さん
もう、お眠れ、
啼いても毛布はまだ買へぬ。

ぼっつり子猿

ぼっつり子猿
お岩にひとり。
どうだうと、急瀬、
飛沫は寒い。
お山の空に
小さな月がかかるに。

ぼっつり子猿、
もう聲出ぬか。
一聲啼けよ。
とてもとても寒い。

さびしい人たちのうた

閻魔の癇癪

眞赤なお閻魔さま、大眼玉、
お口をくわつと開け、何ョ睨む。

おまゐりしましよと、雀の子、
こわごわ、下から覗きます。

それでもお閻魔さま物言はぬ、
おやおや、でくのぼうか、腹なしか。

雀はお膝にちよいと乗る。
それでもいよいよ知らぬふり。
耳からお口へもぐり込む、
これでも痒ゆないか、お默りか。
くわァつと一聲、閻魔さま、
雀は目まはして飛んで了うた。

良寛さま

良寛さまはお坊さま、
子供の好きなお坊さま、
子供みたいなお坊さま。
子供見たいに金もたず、
子供見たいに遊んでる。
子供といつでも遊んでる。

ある日、田圃でかくれんぼ、
夕燒小燒でかくれんぼ、
子供といつしよにかくれんぼ。
しめた、積藁、こりやよかろ、
良寛さまは、こつそこそ、
その藁かぶつて、こつそこそ。
そのうち、とつぷり日は暮れる。
子供はお家へかへります、

坊さま忘れてかへります。

星がきらきら光ります、
待つても待つても誰も來ず、
霜がきらきら光ります。

藁をかぶつてお坊さま、
息をこらして、お坊さま、
來るか來るかと、お坊さま。

誰も來ませぬ、風ばかり、
野鴨が遠くで鳴くばかり、
だんだん夜ふけになるばかり。

やつぱり來るかと、お坊さま、
ほんとに來るかと、お坊さま、
たうとう夜つぴて、お坊さま。

誰も來ませぬ、夜が明けた、
雀がちゆんちゆく鳴き出した、

朝燒小燒で夜が明けた。

來ました、百姓が、すたこらさ、
お鍬をかついで、すたこらさ、
畔霜踏み踏み、すたこらさ。

今度は來たぞと、お坊さま、
深息つめつめ、お坊さま、
今度はびくびく、お坊さま。

おやと百姓が目をつける。
なんだか、變だぞ、この藁が、
おやと百姓が手をかける。

ついとはがせば、おどろいた、
おやおや、おやおや、お坊さま、
良寛さまかへ、おどろいた。

叱つ叱つ、そつとしろ、見つかるで、
子供がゐるかと、お坊さま、

叱つ叱つ、そつとしろ、見つかるで。

良寛さまは嘘つかず、
子供にだまされ、氣がつかず、
いつでもだまされ、氣がつかず。

子供見たいなお坊さま、
なんと、のろまのお坊さま、
なんと、佛のお坊さま。

鶏爺さん

鶏爺さん、お人よし、
妻子もよう無い、親も無い。
鶏爺さん、お金無い、
鶏一羽がただ大切。

鶏爺さん、貧乏だで、
人様お畑に畑うちに。
鶏爺さん、さびしいで、
鶏ふところ入れてゆく。
鶏爺さん、草取れば、
鶏やそこらで遊んでる。

鶏爺さん、日が暮れりや、
鶏ふところ入れて去の。
鶏爺さん、住む家は、
ちよんぼりお菰のあばら屋根。
鶏爺さん、ねむれない、
鶏かかへて、雨もりに。
鶏爺さん、どうなさる、

鶏や卵も生みやせぬに。
鶏爺さん、鶏と、
朝から晩まで眺めてる。

雉子射ち爺さん

雉子射ち爺さん、雉子射たず、
いつでも、しよんぼり下りて來た。
山からしよんぼり下りて來た。

雉子射ち爺さん、雉子見ると、
雌鳥かはいそ、雄綺麗、
子の雉子かはいそ、射たれない。
雉子射ち爺さん、雉子射たず、
谷底ばつかり射つて來た。
青空ばつかり射つて來た。

山の小父さん

眞白兎をぶら下げて
山から小父さん下りて來た。
蕪や大根と代へに來た。

お山はすつかり雪でがす、
こんどは、しこたま貰つてこ。

先生

岬の學校、丘の上、
棕梠の木一本、夜は暗い。
先生おひとり、ぼつつりこ。

空にはチラチラ、星の數、
四角の青い窓一つ。
　先生おひとり、ぼっつりこ。

燈に影ぼふしうごいてる、
ごうごこ高まる浪の音。
　先生おひとり、ぼっつりこ。

あれ、あれ、オルガンが鳴り出した。
ほらほら、いつでもあの歌だ。
　先生おひとり、ぼっつりこ。

夜風が出て來た、何處でか、
探海燈が動いてる。
　先生おひとり、ぼっつりこ。
千鳥がへうへう啼いてゐる。
四角の青い窓ひとつ。
　先生おひとり、ぼっつりこ。

あ、あれ、オルガンが鳴りやんだ。
フツと燈がまた消えた。
　先生おひとり、ぽっつりこ。
空にはチラチラ星ばかり、
ごうごうごうと涙の音。
　先生おひとり、ぽっつりこ。

落穂ひろひ

落穂ひろひが
田にまだ一人、
かァがみかがみて、
あちこち歩む。

鐘が鳴るのに、
田にまだ誰か、
かァげりかげりて、
あちこちあさる。

もう燈がついたに、
田にまだ一人、
ひィとり、ひろうて
あちこち、暮れた。

落穂ひろひよ、
田を早やあがれ、
宵の明星が、
ちろ〳〵、ちろり。

馬どろぼう

お馬を盗んだ治作爺、
お縄で縛られ、睨んでた。

「彼奴め、朝から食べなんだ、
早う食べさせ、ひもじかろ。」

食べずに盗んだ治作爺。
お馬の顔見て、打たれてた。

かぐや姫

かぐや姫かよ、うしろさの籔に、
何か光るぞ、みんな早うおいで。
みんな出て見りや、雀が逃げた、
笹に入り日が、ちらつくばかり。
かぐや姫かよ、こつちさの籔に